躍 いきいき狭山人（びと）

常に時代と向き合う心 想い感じたことを短歌で表し続け 求められるからより高みにのぼる

「アララギ」廃刊後は「短歌21世紀」を創刊し代表を務めています

「短歌は商品ではありません。だからこそ、自分の思ったままに、感じたままに自由に表現できるのです」と優しい笑顔で語る大河原惇行さん。短歌新聞社の「短歌新聞社賞」を受賞した歌集「天水」の作者です。はり灸の仕事をしながら短歌を作る大河原さんは、「仕事があるから生きている実感が持て、職業歌人ではないので、何にも縛られることと無く純粋に短歌を作れる」と語ってくれます。そして、「好きなテーマで自由に短歌を作れるから幸せだ」とも。

そんな大河原さんの短歌が、昭和49年、歌人の登竜門として知られる現代歌人協会賞の最終選考まで残りました。惜しくも受賞できませんでしたが、このときのことを「候補で終わってしまったのは残念でしたが、だからこそ、好きなテーマで短歌を書き続けることができました。そこで、力を蓄える時間を持てたことで、大きく羽ばたくことができたのでしょう」。と語ってくれます。そして「今回の短歌新聞社賞は、窪田章一郎先生や小暮政次先生も受賞しているので、なおのことうれしいです」とも。現在は市内で短歌のサークルを手ほどきする大河原さんは、常に時代と向き合いながら短歌を作ります。編集はすべてパソコンを使い、自らのホームページを作り、視覚障害者への朗読CDも作っています。

大河原さんが短歌に興味を持ったのは、小学校の高学年のころ。授業で書いた短歌が県に表彰されたことが始まりです。そして、本格的に短歌の世界に足を踏み入れたのは、「アララギ」に入会してからでした。当時19歳だった大河原さんは、訪れた「アララギ」発行所で、故五味保義氏（歌人）に出会い「一生歌を作るのなら、勉強するといい」と諭されたそうです。その言葉に感銘を受けた大河原さんは、「アララギ」へ入会。当初は、いい歌が作れず苦しむことも…。それでも、できるところから少しずつ腕を磨いていきます。

大河原さんは「その積み重ねがあったからこそ今があります。短歌は、表現の手法に知識や経験が必要なのです。そして、歌人として求めるものが高ければ高いほど、技術が上がります」と語ってくれます。

短歌をとおし多くの歌人や友人と出会い、切磋琢磨してきた大河原さん。これからも時代をとらえた歌人として、私たちの心に響く短歌を作り続けてくれるはずです。

芽立ち遅き合歓木（ねむのき）に
こころのよりてゆく
十字架ともる
わが窓の西

第13回短歌新聞社賞を受賞した「天水」から

大河原惇行（よしゆき）さん（広瀬東在住）

歌集「天水」
短歌新聞社賞を受賞

オピニオン

皆さんの「声」をお待ちしています。
お寄せいただく際は、住所、氏名、電話番号をご記入ください。FAX 2954-6262(代)
Eメール koho@city.sayama.saitama.jp

茶どころ狭山 お茶を淹(い)れるときは
心をこめて最後の一滴まで

横田泰宏さん
（沢在住）

狭山市の名産はなんといっても狭山茶です。しかし最近は、急須でお茶を淹れるのではなく、ペットボトル飲料のお茶を飲む方が増えてきたと思います。また、急須を持っていない家庭も増えてきたと感じます。

手軽に飲めるペットボトルは喉を潤すのには手ごろですが、心まで潤すことはできないのでは…。お茶は少し淹れ方を工夫するだけで、味や香りが引き立ちますし、狭山茶独特の味と深みがでてきます。そして、家庭でお茶を淹れて飲むことで家族の会話が進みますし、一家団欒(だんらん)が生まれると思います。

お茶は嗜好品(しこうひん)なので、決まった淹れ方はありませんが、目安としては①一人分は約2ｇ ②湯量は茶碗(わん)8分ほどで湯温は60～80℃ ③湯を急須に注ぎ深蒸し茶で30秒、煎茶で60～120秒待つ ④最後の一滴まで茶碗に注ぐ　そして、一番大事なことは「飲む人に気持ちになって心こめて淹れること」です。

これから新茶の季節を迎える茶どころ狭山。「お茶香るまち」ならではの狭山茶を味わって欲しいものです。

市の考え方

貴重なご意見をいただき、ありがとうございます。

市では、「狭山新茶と花いっぱいまつり」などをとおして、これからも狭山茶の振興に努めていきます。

担当　農政課

みんなでつなぐ 人 市民リレー

私の好きな景色…

ひょうたん池

玉川繁男さん
（富士見在住）

私が狭山市内で好きな景色と言えば、智光山公園のひょうたん池です。それは、早朝出向いたときに、カワセミなどのさまざな野鳥を見ることができるからです。

また、四季折々の花が、心を和ませてくれます。これからの季節は、新緑が一層と公園内の自然の美しさを引き立て、散歩するにはとてもよいと思います。皆さんも、ひょうたん池に足を運んではいかがですか。

次回は水野在住の方へ

智光山公園内のひょうたん池

（写真は玉川さん撮影）

Hello ハロー 仲間たち

Vol.296

水富卓球ゲンデル会

「笑顔は心の栄養！」と元気な掛け声で始まります

私たち、「水富卓球ゲンデル会」の名前の由来は、「元気が出る会」で、これを略してゲンデル会です。会のモットーは、「今日も明るく楽しく元気よく」。この言葉のとおり、元気いっぱいの会員60名が、水富公民館で活動しています。

私たちが目指すものは、地域とのつながりを持ち「どこでも挨拶(あいさつ)できる人を増やす」ことです。そして、参加はすべて会員の自由意志。毎週行う活動への出欠の連絡は不要で、会員それぞれが、自分の時間に合わせて自由に参加しています。卓球の試合に出場することが目的ではないため、自分のペースで体を動かすことも特徴です。また、活動日には、近くの保育園児が遊びにくることも…。これも、自由に活動しているからこそで、会員のだれもが、突然の来訪者を笑顔で受け入れます。

30年間続けられたのは、自由な活動の中にも責任を持ち、互いの個性を認め合ったから…。これが私たちの共通の思いです。これからも、みんなで仲よく元気にピンポンを追いかけたいと思います。

問合せ工藤富子さんへ
☎2954-2050